

# 小学校教員養成のための歌唱指導

若井 健司  
(音楽教育)

760-8522 高松市幸町 1-1 香川大学教育学部

## Singing Instruction for School Teacher-Training Courses Students

Kenji Wakai

*Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saewai-cho, Takamatsu 760-8522*

**要 旨** 小学校教員養成の歌唱指導は、「初等音楽」にて行われているが、授業時間数が少なく、学生達は歌唱技術を十分に習得できていない。しかし、小学校教員採用選考試験には、弾き語りがあるため、限られた時間で歌唱指導の成果を上げる必要がある。解決の手がかりとして、受講生が自分の歌唱についてどのように自覚(自己評価)しているのかアンケート調査をし、その結果と実際の歌唱状況とを比較・分析し、歌唱指導について考察した。

**キーワード** 歌唱指導 弾き語り 発声 小学校教員養成 自覚(自己評価)

### 1. はじめに

学校教育教員養成課程の学生を対象に香川大学では三学期(2年前期)に、「初等音楽」の授業を行っている。この授業は、ピアノの基礎訓練と弾き語りの習得を行う授業であり、小学校音楽科における共通歌唱教材をピアノによる弾き語りが出来よう指導することに重点が置かれている。香川県の小学校教員採用試験では、この共通歌唱教材の弾き語りか、試験科目としてあるため、学校教育教員養成課程の学生にとっては欠かすことの出来ない授業であるが、本学においては、平成10年の免許法改正にともなうカリキュラム改編の際、選択科目となってしまった。

「初等音楽」の授業では、基礎的な音楽理論及びそれぞれの学生のピアノ実技経験を考慮

し、演奏レベルを判断した上で、それぞれの実力に応じた実技指導を行い、小学校教員として必要な知識や実技能力を養成している。基礎的な音楽理論については、小・中学校(又は高校)で学んだ音楽の授業での基礎的な教育が済んでいるであろうことを前提とすれば、ある程度簡略化できるが、少数ではあるが楽譜が読めない学生がいる以上、現状以上には簡略化することは困難と言える。

「初等音楽」には、大きく4つの目的がある。1つ目は、小学校音楽科における歌唱指導に必要な声楽的基礎を習得すること。2つ目は、小学校音楽科での音楽の指導に必要なピアノの基礎的な演奏を習得すること。3つ目は、小学校音楽科での音楽の指導に必要な伴奏のテクニックを習得すること。そして4つ目は、小学校での音楽指導を考える上での理論的裏付けの礎と

なる基本的な音楽理論を習得することである。

平成25年度の授業の履修状況は、前期：「初等音楽Ⅰ」、後期：「初等音楽Ⅱ」、合わせて約70人の学生が受講している。授業内容は、殆ど同じであり、Ⅱでは、Ⅰで学んだ内容を継続し、深めることも可能である。多くの学生が前期の「初等音楽Ⅰ」を履修しており、「初等音楽Ⅰ」では、約60人の受講生を2つに分け、1クラス約30人への指導を弾き語り、ピアノの指導を主に個人指導形式で行っている。ただ、それでは1校時90分を割り振ると1人あたり3分しか指導が行えない。そのため、2クラスとも第3校時の前の昼休みを補講として使い、少しでも指導時間を増やしているのが現状である。また、この弾き語り指導以外に、音楽の基礎知識と技術を高めるため、「ピアノ奏法・ピアノ伴奏法について」「音楽理論」そして「共通歌唱教材の歌い方」の指導も1校時ずつ行っている。

この中の「共通歌唱教材の歌い方」が、唯一の歌唱を専門に指導できる時間である。本来ならば歌唱指導には、他の実技授業同様、積み重ねられた実践が必要であり、現在の何倍もの指導回数と時間が必要である。実技教育である歌唱指導を現状のようなわずかな時間内で、ある程度の成果を上げることは大変困難なことである。その解決のためには、授業時間を増やしたいが、他の授業内容も欠かすことの出来ない内容であるため、授業時間を増やすこともできない状況である。また別に新たに歌唱の授業科目を設けることが出来れば良いのだが、専門教育の授業時間を締め付けられつつあるカリキュラムの中では、授業科目、授業時間を増やすことは到底不可能になっている。このような状況を打開するには、短時間で歌唱指導の成果を上げるための思い切った方法、工夫を見いださなくてはならない。

## 2. 歌唱授業とは

歌は、人間にとって、一番身近で誰でも行える表現方法であり、殆どの子ども達が最初に耳

にし、触れる音楽であろう。その歌を聴いたり、歌ったりする中で、人は様々なことを伝え表現し、感動し、教えられていくものである。その歌唱こそ小学校音楽科授業の基本とも言えるものであり、教科書の内容の多くを占めている。また、歌唱は音楽科授業において、歌唱教材を教師が指導時に模範唱をすることは自然な流れであり、歌を聴かせ歌わすことは効果的な指導となるはずである。その小学校の歌唱の指導の中で今まで主に重要視されてきた事項は、次の通りである。

- ・模範唱を聴いて演奏すること
- ・拍の流れやフレーズを感じ取って演奏したり身体表現したりすること
- ・曲想を感じ取り、また、歌詞の表す情景を想像して表現すること
- ・自分の歌声に気をつけて歌うこと
- ・伴奏の響きを聴いて歌うこと
- ・発声及び呼吸の仕方に気をつけて、曲にあった発声で歌うこと

(森田・山本・山本敬・秋山 1991)

これらの事項に留意しながら、小学校教員として歌唱指導に必要な内容を考え「共通歌唱教材の歌い方」の指導を行っている。具体的には、柔軟体操、母音発声体操、腹式呼吸法、ロングトーン発声法、音程イメージ指導、小学校各学年歌唱教材の歌唱指導などを行い、教壇に上がっての簡易な指揮の実践の指導も同時に行っている。これらの内容は、弾き語り指導時、受講生達の歌う力が、あまりに低くいろんな問題があると感じたために、短時間ながらも少しでも改善すべく取り入れた内容でもある。受講生達は、このような体操、呼吸法、発声法と進めるうちに、次第にリラックス、また、前向きの姿勢になり、大きな響きのある声に変化していく。特に、音楽、音程関係なく声を出させると、驚くほど大きな声になる。しかし、彼らに、小学校各学年歌唱教材を歌唱として必要な、音程、旋律、歌詞を伴わせ歌わせると、先ほどの声から一変し、全く異質の声となり、自信がなさそうな弱い声に変化していく。発声指導により導き出した声は、歌唱時には、ほとん

ど使われず、成果が発揮されないのである。特に、通常授業時のピアノ伴奏をしながらの歌唱（弾き語り）では、人が変わったような小声で歌う受講生が殆どである。

このようなことから、受講生達が自分の歌唱についてどのように思っているのか、歌っている状況を正しく自覚（自己評価）しているのか調査する必要を感じ、歌唱に必要とされる9項目を挙げ、アンケート調査研究を行うこととした。

### 3. 方法

この調査研究では、まず、平成25年6月に「初等音楽Ⅰ」の「共通歌唱教材の歌い方」の授業において、アンケート調査を行った。アンケート調査対象者数は58名。回答者は45名、回答率78%であった。

まず、この授業の中で、小学校4年生以上の共通歌唱教材の中から、過去に教員採用選考試験・第一選考試験・音楽実技課題曲となった曲、また今後、教員採用試験曲となりそうな曲を選び、歌唱させた。通常授業で指導している弾き語りではなく、伴奏者のピアノに合わせて歌唱することに専念させ歌わせた。そして授業終了時に、歌唱時の状況についてのアンケート調査を自記入法で実施した。

アンケートの内容は、設問項目ⅠからⅣにおいて受講生達の所属、音楽、歌唱経験、設問Ⅴでは、歌唱者が歌唱時でも自覚できる以下の9項目、[美しさ][高低][リズム][発音][音程][声量][プレス][発声][表情]についての自己評価をたずねた。また、設問項目Ⅵで、歌うことへの悩み、Ⅶにおいては発声への診断、指導を個人的に受けたいかを質問し、もっと踏み込んだ意見の収集を行った。

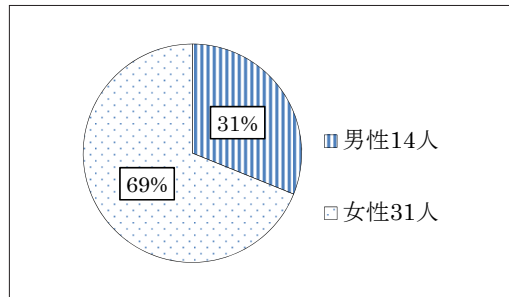
また、「初等音楽Ⅰ」の全授業の終了時に実施している弾き語りの発表時に調査回答者の歌唱状況の観察を行い、アンケート調査による歌唱時の自己評価（自覚状況）と、実際に歌っている客観的状況の比較を行った。

次章の4. アンケート結果では、アンケート

結果の分析を行い、5. 考察においては、設問Ⅴの歌唱時の状況とその問題点、歌唱時観察結果とアンケート結果との比較を含めて述べていきたい。

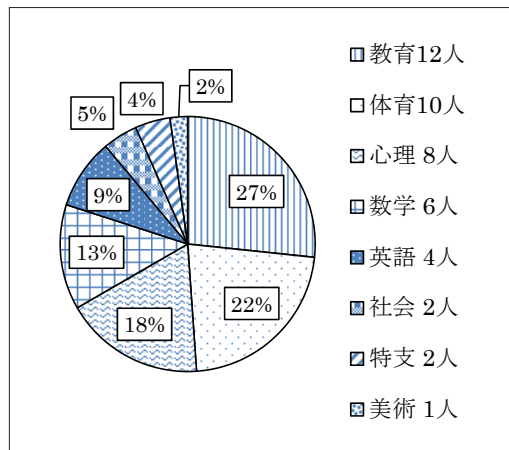
## 4. アンケート結果

### Ⅰ. 性別を教えてください。



学校教育教員養成課程・学校教育実践研究・教科研究区分「初等音楽Ⅰ」の平成25年度の受講者を対象にアンケート調査を行った。履修者数は58名、男女比は、本調査結果とほぼ同じ1：2の状況にある。男子学生が少ない理由には、ピアノ・音楽に苦手意識を持つ学生は男子学生に多いということが考えられる。

### Ⅱ. コース・領域を教えてください。



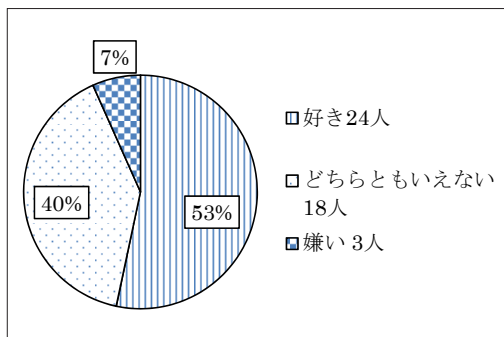
なお、「初等音楽Ⅰ」の履修学期の3学期（2年生前期）には理科領域と美術領域の授業が同じ時間に設定されている。また、音楽領域は、ピアノ、歌、理論等の授業が、専門科目に設定

されているので、履修を勧めていない。幼児教育には、近い内容の授業「幼児音楽」が設けられている。

上の図から履修状況を見ると、前記のような時間割上受講できない領域、他の授業で補えることが可能な領域があるにせよ、各コース・領域に大きく受講者数の違いがあり、受講者数0の領域(理科、国語、幼児、音楽、家政、技術)があることは、とても残念なことである。

学校教育教員養成課程2年生全体の男女比率と比較すると、男性学生の履修率が低いことが判る。学校教育教員養成課程に在籍する全学生144人、内訳は男性67名(47%)、女性77名(53%)。男性数は、女性数よりわずかに少ないにもかかわらず、「初等音楽」の男性履修者数は19名(男子学生28%)、女性の履修者39名(51%)の結果となっている。ピアノを弾いた経験が少なく、音楽が苦手と思われる男子学生がこの数字では、小学校教員採用試験に弾き語りがあることを考えると、無視できない数値である。

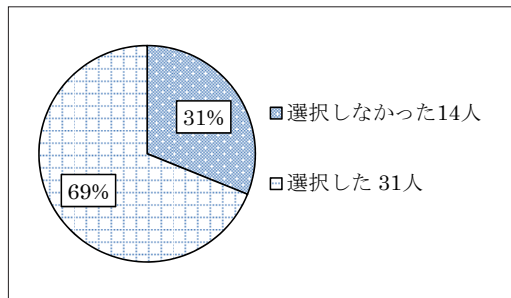
### Ⅲ. 歌うことは好きですか？



半数以上の学生が歌うことが好きであり、嫌いと答えたのは、わずかに3名のみであった。「好き」と答えた受講生24人の男女の内訳は、男性7名、女性17名。「どちらともいえない」と答えた18人の内訳は、男性6名、女性12名。「嫌い」と答えた3名の内訳は、男性1名、女性2名。どの回答もほぼ、男女比が1：2となり、受講者の男女比と同じ比率となっている。歌うことに対する好き嫌いは、男女に関係していないと言える。

「嫌い」と答えた3名は、その理由記述欄に、Aは、「声を通らないから」、Bは、「上手くないから」、Cは、「上手く歌えないから」と記入していたが、この回答では、歌が嫌いな具体的な原因が分からないため、後日、この3名に口頭で質問した。これについては、次章の考察で述べる。

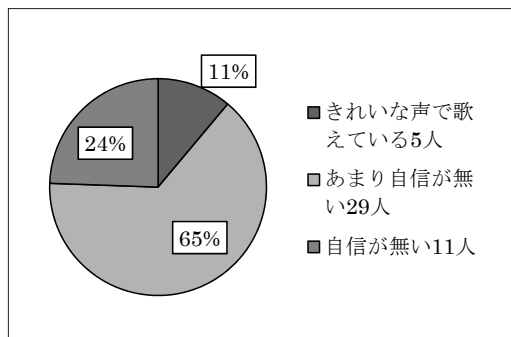
### Ⅳ. 高等学校時に「音楽」の授業を選択しましたか？



高等学校では他の教科のように「音楽」は3年間継続して授業されることもなく、「音楽」の授業のない学校も存在する。また、大学受験にはほとんど関係しない「音楽」の授業を選択する学生は少なく、高校時代、歌唱をする時間、回数は相当少ないと思われる。

### Ⅴ. 小学校歌唱共通教材を歌いましたが、その時の状況を教えてください。

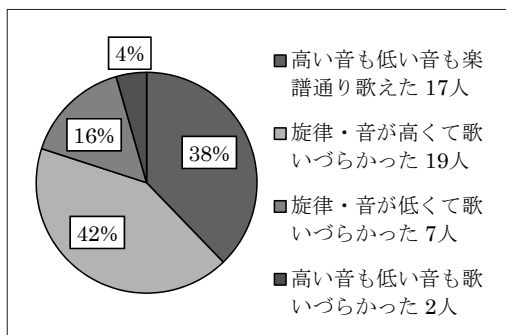
#### [美しさ]



自らを美しい声であると評価することは、相当自信があることかもしれないが、「きれいな声で歌えている」と思っている学生は11%との結果となった。「あまり自信が無い」は、

65%近くを占め、この数値は殆どの受講生が歌えていないことを自覚しているということであり、これは、歌唱指導をさらに進めなければならない状況を示している。更に、24%の受講生が、「自信が無い」と回答していることには、深刻な状況と言え、様々な原因が考えられる。

#### [高低]

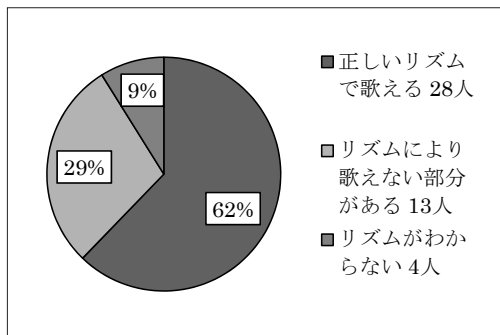


「高い音も低い音も楽譜通り歌えた」と回答した受講生が38%もいることは嬉しい数字と言えるが、その反面、半数に近い学生が高声に対して歌いづらいと答えている。また、低い音域を、高声を出しやすい声区の頭声で歌うためであろうが、低くて歌いづらいと答えた受講生も若干見られた。今回歌わせた曲は小学生のための歌唱教材なので、歌唱した曲の最高音は、どの曲も2点二音であり、最低音は、殆どが1点ハ音である。音域は、1オクターブより、2、3度、幅の広い曲であり、各曲の音域は以下の通りである。

4年：牧場の朝	(音域 1点ハ～2点ニ)
紅葉	(音域 1点ハ～2点ニ)
5年：スキーの歌	(音域 ロ～2点ニ)
冬景色	(音域 1点ハ～2点ニ)
6年：朧月夜	(音域 1点ハ～2点ニ)
我は海の子	(音域 イ～2点ニ)
故郷	(音域 1点ハ～2点ニ)

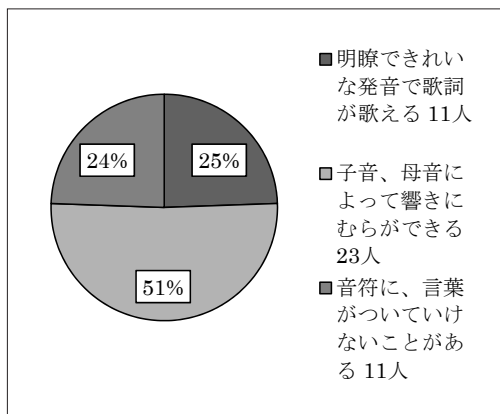
このように音域をあまり高く、また低くなく設定されているはずだが、それにもかかわらず、62%もの受講者が歌い辛かったようである。

#### [リズム]



「正しいリズムで歌える」を選択し、リズムに問題なく歌えていると自覚している受講生が62%いることは、多い数字と思うかもしれないが、小学校の歌唱教材には、小学生の理解力を考慮し、あまり難しいリズムは使われていないのである。それにもかかわれず、38%の学生が「リズムにより歌えない部分がある」「リズムが分からない」を選んでいることから、リズムに自信が持てない、または理解出来ない受講生が多いと言える。

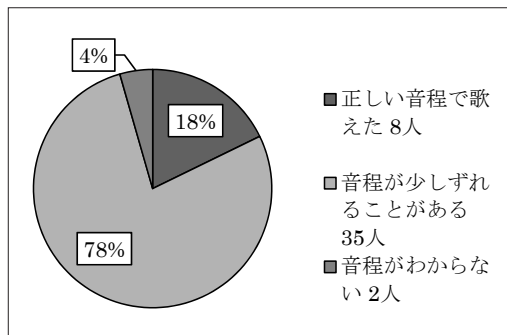
#### [発音]



小学校の共通歌唱教材は、歌詞が日本語であるため日本人にとっては、この上なく発音しやすく、表現しやすいはずであるにもかかわらず、発音に自信が無い学生が意外に多いことが判る。発音の悪さは、滑舌の悪さに起因する場面が多いと言われるが、この他にも音の高低差、発声など、様々な要因が考えられる。



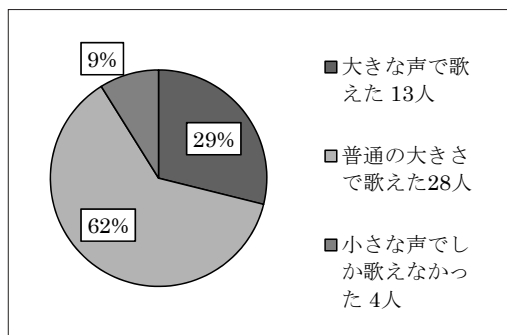
### [音程]



音程については、「音程が少しずれることがある」「音程がわからない」を選んだ受講生は、82%を占め、音程に自信の無い受講生が多いことが判る。特に「音程がわからない」を選んだ受講生は、4%（2名）ごくわずかであるが、この状況にあると自覚しているならば、歌うことに相当な劣等コンプレックスを持っている可能性が高い。この状態で弾き語りをするのは、心の負担となっているかもしれない。早期の個人指導を行う必要があると思われる。

「音程が少しずれることがある」と回答した学生については殆どが、発音の悪さの要因とも言える音の〔高低〕〔発声〕の問題が大きく影響していると思われる。

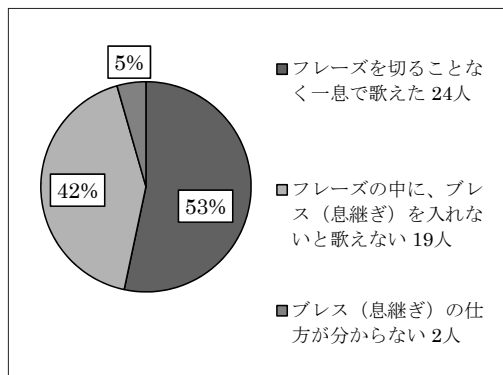
### [声量]



「初等音楽」の弾き語りの授業時、十分な声量で歌っている受講生が殆どいない現状に、大変問題意識を持っていたが、大変興味ある数値を得た。91%の受講生が、普通以上の声で歌えていると思っている。自分の声量が、どの程度であるかを正しく確認することが必要であろうが、これだけの数の受講生が、自分の声量が普

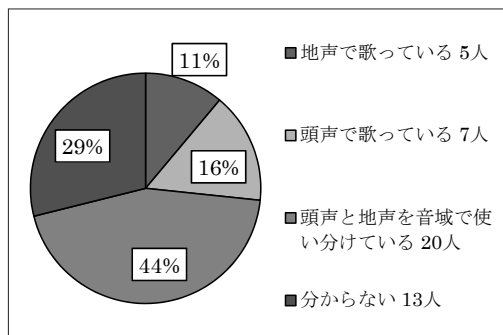
通以上と思うのであれば、彼らの声量に対する自己評価基準が、相当低いところにあると言える。

### [プレス]



プレスについては、半数以上の受講生が問題無いようである。しかし、42%もの受講生が「フレーズの中に、プレス（息継ぎ）を入れないと歌えない」を選んでいることは問題である。共通歌唱教材のフレーズは、小学生の肺活量に適応し、比較的短く、無理なく歌える唱歌などが選ばれている。また、歌詞においては、五七五調の文語体が多いのもフレーズが短い理由である。それを考慮すると「フレーズの中に、プレス（息継ぎ）を入れないと歌えない」「プレスの仕方が分からない」の該当者が半数近くいることは、歌う時に不可欠である呼吸法、腹式呼吸を使わず、胸式呼吸で歌唱している受講生が多いと言える。

### [発声]



今回の選択肢として、歌うときに使う声区、声種として地声（胸声）と頭声をどのように使

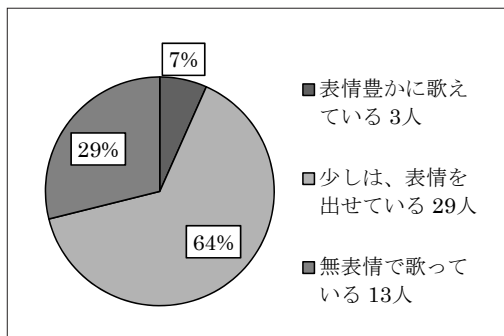
うかをたずねた。

共通歌唱教材は比較的音域が高くなく、幅の狭い音域を持つ曲が選ばれているので、地声だけでも十分に歌える声域であると思われたが、アンケート調査の結果から見ると地声で歌っていると自覚している受講生は少数の5名11%であった。

一方、「頭声と地声を音域で使い分けている」と答えた受講生が、半数近くを占めている。これを選択した受講生は、頭声と地声を音域で使い分けできるということであり、声区を理解し、声域により声をコントロールできていると言える。

また、「分からない」と答えた受講生が29%もいることについては幾つかの疑問が生まれる。「分からない」を選んだ受講生が、地声、頭声のどちらかを、または両方使っているのかを自分では判断できないのか、または地声、頭声自体の意味がわからないのか。これについては、初等音楽の全授業の終了時に行う弾き語りの発表の観察結果を参考にし、次章にて考察する。

[表情]



このアンケート結果は、74%の受講生が、「表情豊かに歌えている」、もしくは「少しは、表情が出せている」と答えている。普段の授業では、殆どが無表情、もしくは、曲とは関係ない表情で歌っているが実状である。このような結果から、受講生の表情に対する基準が、相当低いところにあると思われる。

「無表情で歌っている」と自覚している学生29%についても、いつもの授業で見られる楽譜

を睨みつけてピアノを弾きながら歌っている光景から考えると改善は難しいだろう。

VI その他歌唱教材を歌うことで悩んでいることを記述してください。

#### 発声の問題

- ・成長と共に高声出ない
- ・声にノイズ
- ・地声と頭声の変わり目、高声
- ・声が通らない
- ・声が飛ばない、高さにムラ
- ・声が擦れる
- ・強弱がつかない
- ・地声と裏声のつながり
- ・低声が汚い
- ・低声が汚い
- ・声が低い、声が通らない

#### ピアノを弾きながらの歌唱の問題

- ・弾きながら歌えない
- ・弾きながら歌のリズム×
- ・ピアノ苦手歌に意識行かない
- ・両手弾き、同時に歌えない
- ・弾くと声が出ない

#### その他

- ・知らない曲多い
- ・知らない曲ある
- ・知らない曲があると不安
- ・緊張する

以上20人の記述があり、内容的に上記のように、「発声の問題」「ピアノを弾きながらの歌唱の問題」「その他」の3種類に分けることが出来る。

半数は、発声の問題で悩んでおり、その次に多いのは、ピアノを弾きながら歌うことへの悩みである。あとは、共通歌唱教材でありながら、歌ったことのない曲があることである。

「発声の問題」は、高い声が出ない。低い声が汚い。声が通らない。頭声と地声のつながりがうまくいかないなど、設問Vで質問している内容であり、この回答の中で、注目すべきことは、「声が通らない」の回答の内容に含まれる

かもしれないが、「声が小さい」ことへの悩みが殆ど回答されていないことである。

Ⅶ 発声についての診断、指導を受けたいですか。

・受けたい	10名 (22%)
・どちらでも良い	27名 (60%)
・受けたいとは考えていない	8名 (18%)

このうち、前項のⅥで、その他歌唱教材を歌うことで悩んでいることを記述した20名の回答の回答状況は、次の通りである。

・受けたい	7名 (35%)
・どちらでもいい	11名 (55%)
・受けたいとは考えていない	2名 (10%)

悩みがあるのに指導という解決方法を積極的に望んでいないことが、とても残念だが、その理由が問題だと思われる。

診断、指導を「受けたい」と答えた10名には、短時間であったが後日診断、指導を行った。その中でより具体的な問題点を見いだすことが出来た。以下の通りである。

- ・ピアノを弾きながら声を出せない
- ・滑舌が悪い、声の出し方がわからない
- ・人前に出ると声が出なくなる、特にピアノを弾きながら声を出せない
- ・話し声は高声美声だが人前で声が出ない（変声してから高声になった）
- ・音域が狭い、高い低いができない、中声を裏声で出せない
- ・全音域を裏声で歌い、細く弱い声になる
- ・緊張すると、ほっぺたが突っ張る（表情が硬い）音程不安定、低音が出ない
- ・カラオケ好きだが、歌唱教材は歌いづらい
- ・高音で喉を絞めるように歌う
- ・高音を出すと喉頭が痛くなる、声量が小さい
- ・カラオケ好き、低い音が歌いづらい、大きい声を出すと喉が痛い

これらの問題は、今回アンケート調査した設問Ⅴの9項目のうちの7項目である〔高低〕〔発音〕〔音程〕〔声量〕〔プレス〕〔発声〕〔表情〕に関連する問題であり、残りの2項目である〔美しさ〕〔リズム〕への改善意欲が低いことが判った。

## 5. 考察

初等音楽の履修状況については、「初等音楽Ⅰ」と後期に設けられている「初等音楽Ⅱ」（「初等音楽Ⅰ」と同じ内容の授業、受講者10名程度）の履修者数を合わせても、学校教育教員養成課程の学生数の半分に満たないこと、ピアノ・音楽が苦手だと思われる男子学生の受講者数が少ないことは、苦手な分野を敬遠する傾向であり、大きな問題と言える。教員採用率の向上を強く指摘されている今、「初等音楽」の必修化への早急な対応が必要である。

設問Ⅴ.の小学校歌唱共通教材を歌う時の状況については、「初等音楽Ⅰ」の授業最後の発表時に、きれいな声で歌えていると感じた学生が、何名か見かけられた。アンケート結果の〔美しさ〕を上方修正したい学生は、5人に上った。

〔高低〕については、高い音程を苦しうに地声のまま歌う受講生が多くみられ、また、低い音程を頭声にて、息を思いつきり吐きながら、擦れ声で歌う受講生もいた。今回歌唱した曲の音域は、小学生に適した音域とされているため、指導する際の模範唱の必然性を考えると指導する側もこの音域で歌えるよう訓練する必要がある。

〔リズム〕では、実際、二分音符、付点音符についての曖昧な演奏が多く、はっきり理解出来ていない受講生が38%いることは、問題である。それは、歌唱のリズムより、弾き語りのピアノ演奏に使われているリズムの難易度はかなり高く、弾き語りに大きく影響するはずである。

〔発音〕については、アンケートにより自信が無い学生が意外に多いことが明らかになっ



た。「子音、母音によって響きにむらができる」と回答した受講生が51%もいたが、この響きのむらはどうして出来るのだろうか。響きは、発音によって生まれるのだが、日本語の発音は、殆どが子音と母音が結びつき一音（音節）の発音を成している。しかし、私達の日本語は、英語などのような子音母音が単語・文章に明確に表記されるアルファベットの言語と違い、日本語の最小単位であるひらがら、カタカナを見ても子音母音は表記されていない。そのため楽譜を見て日本語を歌う場合、子音母音を意識せず、ひらがな・カタカナを1単位とした発音をして歌うことになる。母音部分は、音、声の美しさを表現する重要部分であるが、これを意識せずして、きれいな発音、美しい声で歌うことは出来ないのである。「初等音楽Ⅰ」の授業最後の発表時、旋律中の一つの言葉を歌うとき、各母音の変化、また音程の跳躍進行に対応できず次に来る音節の母音に結びつかず、音節ごとの連続性の欠ける歌唱になっている受講生が多く見られた。また、歌唱教材の歌詞は、全て日本語であるが、文語体の曲が多く、特に朧月夜、冬景色などは難解らしく、歌詞の意味がわからずに歌っている学生も多くいる。これは、言葉の表現が出来ないと同時に、発音にも影響していると思われる。

「音程」については、音程に自信の無い受講生が多いことが判ったが、「音程が少しずれることがある」を選んだ学生が殆どが、音の高低、発声の問題が大きく影響していると思われる。特に地声で歌う学生が、高い音が歌えず、音程を狂わす場合が多く見られ、頭声で、低い音が歌えない場合も見受けられる。これには共通歌唱教材の音域を歌える発声技術を習得することが必要であり、地声と頭声を音域で使い分けが出来なければ、多くが解決できることになるだろう。

「音程がわからない」を選んだ受講生には対処が必要であるため実際に声を聴いてみた。そのうち1名は、高声まで地声で歌おうとするために高い音が出ず、音程を狂わせていた。もう1名は、ピアノの音から音程を採ることが難し

く、人の声からであれば、繰り返すことで、音程を採ることが可能となった。このような学生には、ある程度の訓練が必要である。

「声量」については、「初等音楽Ⅰ」の授業最後の発表時には、声が小さいと感じた学生が、ほとんどであり、「声量」に関するアンケート結果を下方修正したい学生は、12人に上る。これは自分の声の音量に対しての意識が低く、また、ある程度の音量が出ていると勘違いしている学生が多いからである。「初等音楽」の主な授業形態は、ピアノの弾き語りであることから、受講生は目の前の楽譜だけを見ながら歌うことになる。この場合、声の方向性は、目の前の至近距離にあるピアノの楽譜であり、この距離感の中での声量判断は、難しいと思われる。実際、授業では、自分の声を教室の後ろの児童にまで届けなければならない。また、模範的な歌唱を児童達に届ける必要性から、自分が弾くピアノの響きのなかでも聞こえる声量が最低限でも必要なのである。

「ブレス」の項目において気になるのは、胸式呼吸の問題である。胸式呼吸は、感情に左右されやすい呼吸であり、安定した継続性の必要な運動には向かない呼吸法である。また胸式呼吸では呼吸時に胸部、肩の筋肉を使うこととなり、腕を使う動作が難しくなるのである。また、逆に腕を動かしながら、胸式呼吸をしても多くの息を吸うことが出来なくなる。すなわち、胸式呼吸をしながら、歌唱することは、効率のいい呼吸が出来ていないことであり、手を使いピアノを弾くためにも悪い影響を与えていることになるのである。

逆に腹式呼吸は、腹筋・横隔膜を動かし、様々な動作、運動時に使う呼吸法でもあり、安定した息を供給できるため、歌唱には最適な呼吸法と言える。このことから、弾き語りには、胸式呼吸ではなく、腹式呼吸が欠かすことの出来ない呼吸法といえる。

「発声」については、アンケートで地声と頭声の使い分けが出来ているのかを調べたが、弾き語りの発表時、地声で歌い続け、高音域に至ると、苦しそうな声質や擦れ声、下がり気味の

音程になりながらもそのまま歌い切ろうとした受講生が多く見られた。アンケートにて「分からない」を選んだ受講生が、発声の方法がわからず、地声のまま歌っているのだろう。声域は、人により一つの声質で歌える音域の違いがあり、歌う曲の音域を地声だけで歌うことが難しい場合、中低音は、地声発声で歌い、高音に向かうと頭声発声を使うのが普通である。

また、「頭声で歌っている」「地声で歌っている」「頭声と地声を音域で使い分けている」と答えた受講生は、地声と頭声についてその違いについて理解していると思われるが、その発声を効果的に使っていないのが現状である。地声と頭声の接点とも言える「換声点」をうまく通過できていないのである。女声に特に多いが、この二つの声質の差が激しく、この「換声点」が一つの旋律内に存在する場合、旋律線に大きな違和感が生じ、音程、声量、美しさに大きく影響するのである。

〔表情〕についての問題は、授業風景からも確認できることであり、特に弾き語りの発表時には、曲調に全く関係の無い表情で歌っている受講生が多く見られる。それは顔の表情を作る、表情筋を使えていないためである。表情筋は、声質に影響し、頭部の共鳴にも関係し、感情を込めた歌い回しや声質を明るくすることが出来る。また、発音に必要な滑舌にも大きく影響する顔の筋肉なのである。この表情筋の活用については、あまり重視されてきていないが、教師に必要なコミュニケーション力にも欠かせないものでもある。

最後に、歌の好き嫌いを尋ねた設問Ⅲで、「嫌い」と答えた3名(A, B, C)について考察していきたい。先に述べたように、嫌いな理由の記述欄で3回答(A声を通らない、B上手くないから、C上手く歌えないから)を得られたが、この回答だけでは歌が嫌いな具体的な原因が分からないため、後日、この3名ABCの受講生には面接し調査した。その結果は、以下の通りである。

A受講生は、普段の会話時とは異なり、歌う時など緊張すると声が小さくなるらしい。実

際、歌唱時の音量は小さく、表情がない。アンケートでは、この2つの項目〔声量〕〔表情〕では、「普通の大きさと歌えた」「少しは表情を出している」と答えていることから、自覚が足りないと思われる。但し地声と頭声の使い分けは、短時間の指導で可能になり、高音はとてきれいな音色で歌えるようになった。

B受講生のアンケートでは、〔美しさ〕〔高低〕〔発音〕〔表情〕の項目に低い評価をしているが、実際の歌唱時は、〔美しさ〕〔高低〕〔発音〕については、上方修正しても良いほど歌えている。A受講生同様、人前にて歌うことに緊張し、自信が無いらしい。頭声で低音まで歌うため、低声部の音程が不安定になる問題を抱えていた。

C受講生は、音程通りを正しく歌うことに自信が無く、〔音程〕の項目で「音程がわからない」と答えた受講生で、ピアノの音から音程を探ることが難しく、人の声からであれば、繰り返すことで、音程を探ることが可能となった。歌がきれいな理由としては、人前で歌うことへの恥ずかしさ、正しい音程で歌うことへの不安などであることが今回の調査で判った。

## まとめ

今回の研究では、小学校教員養成学生における歌唱の問題点を、アンケートと実際の歌唱時との比較から考察することができた。特に問題視したい項目は、〔音量〕〔表情〕の2項目であり、学生達の自覚が大きく足りないことが明らかになった。この2項目は、自らの体を動かし、喉を使い表現し、コントロールすることが必要だが、これらを正常に動かしコントロールするには、客観的な視点、聴覚を身につけてはならない。

その解決策としては、あまりにも直接的で、受講生達には大いに抵抗感があると思うが、歌唱状況を録音、録画し、各自に確認させることが、一番の早道であろう。

また発声の問題の解決には、声の種類、発声法を習得させ、腹式呼吸法などの継続的なト

レーニングが必要である。特に、ピアノを弾きながらでなく、正しい姿勢で人に歌を届けるための歌唱体験を増やし、良く鳴る身体を手に入れ、その上での弾き語りの実践を積むことが必要である。また、受講生の中には、個人指導でなくては、問題の解決に至らない者もいる。授業の初期段階でアンケートを採り、そのような受講生を把握することも必要である。今後は、これらの結果、考察を考慮し、よりきめ細やかで効率的な歌唱指導を進めていきたい。

もともと人の声は、それぞれ特有な個性を持ち、その人のイメージの大きなウエイトを占めている。声の特徴は、個人の身体的な違いに多くは起因しているが、それぞれの性格、生活してきた環境も大いに影響しているのである。その環境が良い方向に変われば声も良い方向に変わっていくと考える。学生達にも気づいて欲しいことは、もっと物事に積極的に向き合うことである。これまで置かれてきた受験勉強に染まった生活環境から抜けだし、思いっきり声を出して話したり、歌ったり自らを表現しようとする能動的な感性を取り戻して欲しい。そうでなくては、人前での恥ずかしさや緊張を取り除くことはできず、響き渡る声を、美しい歌声を手に入れることなど到底出来ないことだろう。

#### 【引用文献】

森田百合子, 山本金雄, 山本 敬, 秋山 衝共著  
1991 「新版 声楽教本」 教育芸術社 PP. 219

#### 【参考文献】

フレデリック・フスラー／イヴォンヌ・ロッド＝マー  
リング著 須永義雄／大熊文子訳 2002 「歌う  
こと」 発声器官の肉体的特質 音楽之友社  
橋本静一著 1996 「声の発見～成長期のヴォイスト  
レーニング」 音楽之友社  
初等科音楽教育研究会編 「最新初等科音楽教育法」  
2009 音楽之友社  
渡辺陸雄著 1996 「小学校の歌唱指導診断38」 音楽  
之友社